

トランスジェンダー

をいきる

(5)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

小学生(2) 外発的男性性

1 始めに

「男は寡黙で口数が少なく、感情表現が乏しい。女は多弁でおしゃべりで、感情表現が豊か」、「男は人前で涙を見せたり弱さを吐露したりつまらない言い訳をしたりしない。女は人前で平気で涙を見せたり弱さを吐露したりつまらない言い訳でその場をごまかしたりしようとする」、「男は食事の好き嫌いを言わず、甘い菓子などは好まない。女は食事の好き嫌いを平気で言い、甘い菓子を好む」

こんないささか時代錯誤的で虚構な男性性・女性性定義を固く信じて疑わなかった私の前に、ある日、一人の男の子がクラスメートとして現れた。

Aは活発な男の子。スポーツ万能で優秀な成績を収めていたが、そのことを周囲に吹聴することはなかった。また、特に担任の女性教師との間でいさかいを起こし、その度怒りを露にしたり、寡黙に陥っていた私とは異なり、自由に感情表出したり、その感情を言語化したりするところや、争い事を好まないという性格が、当時の私にとっては「女性性が高い」と写った。男の子でありながら、高い女性性をフルに利用して、周囲とのコミュニケーションを円滑に行っていた彼のそうした行動様式に対して嫌悪感を抱くどころか、いつも羨望のまなざしで見っていた。しかし、彼とのこのような出会いは、下に詳述するように、

これまでの男性性・女性性定義を揺るがす「驚異的な出来事」として、さまざまな場面で立ち表れてきた一方で、女性性の高い彼の行動様式を利用して、更に強固な男性性を形成していくことになる。

今回は、彼の感情表出を通じて、自ら男性性を構築・強化していったものを「外発的男性性」と位置づけ、について記述する。

2 男の子が「泣いたり弱さを吐露したりする」ということにショックを受ける

私は A と出会う前、走っていてつまずき、顔を酷く擦り剥いて血まみれになったことがあった。しかし、ジェンダーが男である私は、「男は涙を見せたり弱さを吐露するべきではない」という定義に従い、大人の前では決して涙を見せずに気丈に振舞っていた。また、教師や周囲の大人たちから酷く叱責されたときも、目にうっすら涙をためることはあっても、決して外に出してはならないという訓辞にも似たような誓いを立てて厳格にそれを守っていた。まして、本屋テレビなどによる感情移入など言語道断、といった具合に、極度に感情移入を自らに禁じていた。

- ① ところが、男の子である A は、例えば走っていて転んでどこかを打ったと言っては泣いていたし、教師や周囲の大人たちからの叱責に対しても、自分の弱さを吐露しながら謝っていた。また、本を読んでいて感情移入したとっては涙を流しながら、その場面を語っていたこともあった。その度に私は、彼の「泣いたり弱さを吐露したりする」という行為に少々奇異な感情を抱きながらも、なんとかその場を取り繕うようにして、彼の涙を見ないようにしてきた。

そんなある日、私はクラス全員の前で、自分がいじめられていることを告発した。とつとつと語る私の話、彼がたった一言、「かわいそう！」と言って涙を流した。今まで彼の涙を見ないようにしてきた私であったが、この日は彼の涙を真正面から目撃したこともあって、大きなショックを受け、それ以上語ることをしなかった。

私がショックを受けたのは、自分の話によって彼を泣かせてしまったことではなく、「男の子でも泣く」という事実を目の当たりにしたことであり、もはやその事実から逃げることを赦されず、直視しなければならないという強制にも似た感覚であった。しかし同時にそのことは、男性性に縛られない彼の感情表出のあり方を知った瞬間でもあった。つまり、トランスジェンダーの私とは異なり、トランスジェンダーではない彼の方が「私の話しに感情移入して泣いた」という事実によって、「男は涙を見せない」という自己の男性性定義のハードルを「超えたこと」が、ショックとして立ち表れてきたのである。

それ以来私は、彼が涙を見せる度に、「男は人前で涙を見せないが、女は人前で涙を見せる」という自己の男性性定義を彼に当てはめ、「人前で涙を見せる行為」は女性性の枠組みとして捉えるようになった。その上で彼を男の子ではなく、「女の子」として位置づけた上で、彼のそのような高い女性性を利用し、「男とは、女とは違って、泣ける事柄やスペース

が限られているから、俺の前では思いっきり泣けばよい」というように、男性の涙を見せてもよいキャパシティを狭く限定することで、自己の男性性をいっそう強化していった。その結果、彼が涙を見せるたびに、自己の中で彼より上位の男性性を担保しながら、男としての懐の深さや面積を拡大していったのである。

3 男の子が「甘いお菓子を口に作る」という事実を作文で知る

4年生になって、担任が若い女性教師になってから、私たちはクラスで文集を作成することになり、毎週2時間ずつの詩や日記や作文の時間が組み込まれた。1時間は作文を書く時間、1時間は先週の作文を文集に発行したものを読みあう時間に割り振られた。その際、自己の書いた作文を自己の肉声で読みあう時間と、クラスメートの作文を互いの肉声で読みあう時間が週ごとに決められた。

たまたまその日は、自己の書いた作文を自己の肉声で読みあう週であった。私の作文はいわゆる「レポート作文」で、事実や事柄などをただ列挙するだけの無味乾燥な内容か、怒りを露にした「怒りマネジメントの低い作文」であった。それに対してXの書いた作文はいわゆる「レポート作文」で、そのときの情景や感情の変化などを細やかな筆致でわかりやすく描いていた。

文集が配られると、私は真っ先に彼の「レポート作文」を読んでいたのだが、この日の彼の作文は、私にとっては読むに耐えないものがあつた。すなわち、そこに記されていたのは、またしても自己の男性性定義を根本的に揺るがされる驚異的なものであつたからだった。

作文の内容は、家でのクリスマスパーティーの場面であつた。ケーキを食べようとしたとき、誤ってクリームが指先についてしまい、それを舌でなめると、ふんわりした甘いクリームの味が、口いっぱい広がった、という、なんともほのぼのした表現であつた。

これを読んだ私は、「男の子が甘いお菓子を口に作る」という事実と、「指先にくっついたクリームをなめたことを作文に書く」という行為に、2重のショックを受けた。すなわち、「男は甘いお菓子を食べない」という自己の男性性定義を揺るがされたこと、指先にくっついたクリームをなめたことで、クリームのふんわりした甘さを味わったことを作文に「書く」という一連の行為が、「男としてあるまじきこと」として認識したからである。その一方で、「男は甘いお菓子を口にしないが、女は甘いお菓子を口に作る」という自己の男性性定義に、彼の一連の行為を当てはめ、そこから彼の女性性を引き出した。その結果、彼に対する「男の癖にこんなこと書いて恥ずかしくないのか」という批難ではなく、凝り固まった男心にぱっと明かりをともしてくれた女の子の存在を、彼の中に見たのである。したがって、この場面でも私は彼の女性性を利用して、自己の男性性を強化していった。

4 外発的男性性形成に見られる性別2元性と、社会とは異質の異性愛規範の構築

上記2つのエピソードに共通しているのは、彼のこのような女性性の高さに対して、「凄

いやつ」とか、「俺にはないところを持っている尊敬に値する行為」として認識していたことである。その一方で、「それは、A が身体的に男の子であるから、涙を見せたり弱みを吐露したり、甘いお菓子を口にしてもいいけど、FTM トランスジェンダーの私がそのような一連の行為をすると、女性として見られるので危険である」として、厳格に禁じていた。したがって、いつも私は FTM トランスジェンダーであることを楯に、常に彼の女性性の高い感情表出の仕方に対して距離を置くことで、唯一自己の男性性を外発的に強化する手段を見出した。その結果、私にとって、人前で涙を見せたり弱さを吐露したり、甘いお菓子を口にするのは「当たり前ではないこと」として受け止め、「俺には到底できひん」、「俺やったらようせん」というように、自己の感情をシャットアウトしていたのである。

そこには、男女という性別二元性を疑う余地のない、または男女どちらでも選択の余地はありうる、というようなグレーゾーンを赦さない、という排他的な要素も含まれていた。自己の男性性・女性性の定義に固執し、なおかつ女性性の定義に当てはまるものをシャットアウトさせなければ、外発的男性性を強化することができないという脆弱性を垣間見ることができる。一見強固な男性性を形成しながら、実は3画定規やものさしなどの決まりきった定規がなければ、この外発的男性性はもろくも崩壊してしまう、という危うさも感じられる。

更に、彼の高い女性性を更に高く見積もることによって、自己の外発的男性性が鼓舞され、彼との間に社会とは異質な「異性愛規範」を構築しようとしていた。これは、彼の高い女性性を利用して、彼をジェンダーレベルで女性と見立てて、自己の外発的男性性を鼓舞し、強調することで、通常的身體レベルでの異性愛規範とは異なった仕方、彼との間でジェンダーレベルでの「逆転した」異性愛規範を構築しようとしていたのである。

5 終わりに

外発的な男性性が鼓舞される時。それは、彼らとのコミュニケーションにおいて、彼らの行為が、自己の定義つけた男性性より下位にあると判断した場合、つまり、彼らの行為より、自己の行為のほうが上位の男性性を獲得している、と判断した場合である。この傾向は現在でもおおむね変化していないものの、絶えず彼らとのコミュニケーションにおいて、特に男性性構築に関して、そのつど優劣を意識しなければ、外発的男性性を構築することができない、という脆弱性にも気づき始めた。

今回は、A の女性性の高い感情表出を利用しながらも、それとは別に、ほとんど信仰的に内面化しているもうひとつの自己の男性性を「内発的男性性」と位置づけ、そのエピソード分析を記述する。その上で、外発的男性性と、内発的男性性との相互補完性によって、どのような男性性を形成しようとしてきたかを考察する。

(立命館大学大学院先端総合学術研究科後期博士課程)